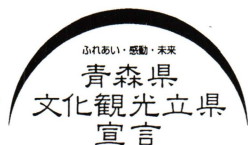


センターだより



昭和43年から
平成4年までの庁舎

平成5年以降の庁舎



目次

活潑潑地の30年2

所長 青山 禎 夫

歴代所長ご寄稿

昭和43～52年度所長 津幡 文隆 氏2

昭和53～59年度所長 伊藤 進 氏2

昭和60～61年度所長 武尾 善蔵 氏3

昭和62年度所長 秋山 俊孝 氏4

昭和63年度所長 高橋 邦夫 氏4

平成元～2年度所長 関野 哲雄 氏5

平成3～4年度所長 村上 圭郎 氏5

平成5～6年度所長 菅野 溥記 氏6

平成7～8年度所長 福士 正道 氏7

水産増殖センターが受けた主な賞7

水産増殖センター30年間の主な試験研究の推移8



活潑潑地の30年

所長 青山 禎 夫

水産増殖センター満30歳。ほぼ30年間を一区切りとした年齢層を一世代という（広辞苑）が、実感としても、そう思う。設立時（昭和43年）の重点課題の一つであったホタテガイについてみても、「つくれば売れる」時代に始まり、「販路の拡大」、そして、「大衆化と低価格化」時代へと増養殖産業の通過路を歩んできた。

しかし、我々には現状に止まることは許されず更に前進をしなければならない。増養殖産業が一層の安定的発展と拡大を遂げるためには、天然資源を対象とする生産量が安定すること、増養殖技術が進展していくための研究開発を怠らないこと、そして、養殖魚に対する消費者の理解を深める説得力のある運動を続けていくこと等が必要な条件と思う。

30周年記念号の発行にあたり、歴代の所長の皆さんから貴重なご寄稿をいただきましたことに感謝申し上げます。



【在職当時】

折角の原稿依頼ですが、体調が悪く原稿書けそうにありません。皆様の御健康とセンターの益々のご発展をお祈り致します。

（津幡 文隆氏からの葉書）

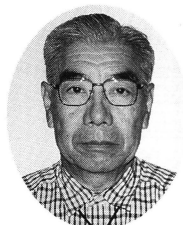
初代所長津幡文隆氏には30周年記念号へのご寄稿をお願い致しましたが、ご高齢のためご辞退されました。水産増殖センターの設立から昭和52年度までの10年間にわたって所長を務められ、数多くの業績と後継研究者の育成に尽力されたことに深く感謝致します。

昭和43～52年度所長

津 幡 文 隆 氏

同氏の著書「陸奥湾ホタテガイ漁業研究史」（1982）の中の一文を引用させていただき、お礼とともに今後のご健勝を心から祈念申し上げます。

「いずれにせよ陸奥湾のホタテガイ漁業発展には、官民一致した協力体制が必要で、将来このような体制がとられ、衆知を集めて、天然採苗、漁場行使が適正に実行に移されれば、先人の築き上げた青森県のホタテガイ漁業は、この新しい日本の時代の動きに伴って、正に画期的な大飛躍を果たし、輝かしい時代が実現するものと確信する次第である。」



一 つ の 回 想

水産増殖センターが発足してから、もう30年になると聞き驚いています。私がセンターに奉職したのは、昭43

昭和53～59年度所長

伊 藤 進 氏

年から60年迄の17年間で、1度も転勤がなく、純粹培養状態でした。それにも拘らず、私はニワトリの生れ代りか、ミョウガの食べ過ぎか、老人ぼ

けが始まったのかは分かりませんが、当時の記憶は忘却の彼方に霞んでいい、今は只キノコや山菜採りなど、趣味三昧の生活を送っています。

今度、青山所長さんからのメッセージと、センターだよりの最新号をお送り戴き、やっと当時の思い出が幾らかよみがえって来ました。

センターだよりに就てですが、これは私が所長に就任した翌年（昭54年）の創刊だったと思います。当時既に漁政課から水産だよりが発行されておりましたので、センターからもこれに似た速報誌を出してみたいと考えたのが動機だったと思います。

皆で編集方針を話し合った結果、(1)漁業者や

関係機関を対象にして、センターの業務内容や結果を2ヶ月に1回程の割合で速報する。(2)担当職員の顔写真付きで、本人の生の声で書き、読み易く親しみ易いものにする、と言う事にしました。なお私としては、所員それぞれが折に触れて担当業務を見直し、自分探しの一助にしてくれる事を、またこれを通じてセンターが活性化する事を期待していました。

そのセンターだよりが、皆さんのご努力により19年間連綿と発行し続けられ、今回は第83号に達すると聞き、本当に嬉しく存じます。センターとセンターだよりの、更なるご発展を心から期待しております。



センター新築のアドバルーンをあげて

武 尾 善 蔵 氏

私が当所に在職したのは、昭和60・61年度の短い期間であった。当時の施設は、昭和41・42年度の2ケ年にわたり建設されたもので、すでに20年を経過していた。したがって、海水の取水能力不足、給水管の漏水、屋外水槽の亀裂等随所に老朽化が目立っていた。

この頃取り組んでいた主なる課題は、ホタテガイへい死原因の解明、アカガイ種苗生産技術開発、トゲクリガニ増養殖技術開発、そして、マダラの初期飼料開発研究等であった。

一方他県では、バイオテクノロジーの導入によるヒラメ、サクラマス、アユ、アワビ等の三倍体作出研究が競って行われていた。そして、バイオテクノロジーの導入は、今後の水産増養殖技術開発にあたっての重要な手法となるであろうと云われていた。このような試験研究情勢のもとにあって、既設の施設では適切に対応し得ないことを憂慮していた。特にバイオテクノロジーを導入するとしてもそのための施設、機器等は皆無であった。

そこで、今後の新たな課題等にも対応し得るように、この際当センターを全面新築し、施設整備を図る必要があると痛感した。この頃、北海道において釧路水産試験場加工分庁舎が32億円程で新築されたと聞いていたので、当所も新築にあたっ

ては、せめてこの程度の予算規模までは可能だろうと考えた。勿論、県の財政事情等もあり、そう簡単には認めてもらえないだろうとは思っていた。しかし、私の退職（平成元年3月）までに残された期間は、昭和61・2・3年度の3ケ年しかなかったもので、是非とも在職中に新築の目途をつけて去りたいと願望していた。

たしか昭和60年の夏頃だったと思うが、県会議員が当所を視察された際に、新築の必要性を訴え協力を要請したと記憶している。このことが初めて対外的に新築のアドバルーンを掲げた時であったと思う。その後、早速所内の各部に各々の新築へ向けての具体的な素案づくりに着手してもらった。職員には、ブロック会議等で他県に出張する場合などあらゆる機会を利用し、先進県の施設の整備状況等を調査してもらった。各部毎に、また全体的に幾度となく協議、検討を重ね62年度末にようやく一応のたたき台をまとめ、これを水産部で組織している技術会議に持ち込むことが出来た。そして、私は4月の定期異動により当所を去った。

その後は後任の所長さんや水産部長さんのご努力によって、平成元年度予算で正式に新築実現に向けてスタートすることになったと聞いたときは本当に嬉しかったことを今でも鮮明に覚

えている。

なんとか在職中に目途をつけることが出来、平成5年度から稼働を開始したこの立派な施設を十

二分に活用され、水産業界発展に貢献する試験研究を推進されるよう期待しております。

昭和62年度所長



【在職当時】

水産増殖センター発足30周年
おめでとうございます。

さて、私がセンターに在職した昭和62年度は、青森県栽培漁業協会の設立、県の魚にひらめが指定されるなどひらめ栽培漁業の節目の年でした。

今、当時を振りかえってみると、自分は、何をしていたのだらうと思うと反省と恐縮の二語が頭の中をよぎります。

秋 山 俊 孝 氏

最近、テレビ等でひらめの稚魚の放流のニュースが流れるたびにひらめの水揚量日本一を回復とのコメントがつくを見ると、在職当時、ひらめの種苗生産試験に懸命に取り組んでいた田村魚類部長をリーダーとする方々の顔が昨日のように思い出されます。万感をこめてご苦勞様でしたと申し上げます。

最後になりましたがセンターの職員の皆様と漁業者の皆様の益々のご発展とご健勝を祈ります。

昭和63年度所長



増殖センター時代の思い出

高 橋 邦 夫 氏

増殖センター勤務を最後に県職員を卒業して早くも一昔になんなんとし、記憶も鮮明さを欠きつつある昨今です。センターが県全域の海面増養殖の調査研究を所管することとなった昭和44年に県水試から転入し、昭和58年に再び県水試に移るまでの14年間はセンター時代ということになります。昭和45年から栽培漁業開発調査が始まり担当することになりました。これまでセンターでは貝類、海藻類が増養殖研究の対象となっていました。魚類、甲殻類を扱うことになり当然種苗生産研究が重要な課題となります。経験は皆無、暗中模索のスタートです。貝類の種苗量産を目的に造られたセンターの施設は魚相手ではなにかと使い勝手が悪く、また既存試験研究の中に割り込むため、仔稚魚飼育や餌料培養スペース、水槽の確保、濾過海水や調温海水の不足など問題だらけでした。これが魚類の種苗生産研究に携わるきっかけとなり、昭和47年から52年まで国の指定調査研究としてヒラメ・

カレイ類種苗生産試験を実施、さらに若手に引継ぎ県単事業で数年継続されました。この間、稚魚飼育室や餌料培養室の改造、量産実験棟の新築などかなり整備できました。ついで忘れられないものに昭和54年に始まった別枠研究サケ海中飼育放流試験があります。300万粒の発眼卵を北海道から移入し、孵化飼育することになりましたが海が相手のセンターには施設も水もなく、野辺地川内水面漁協や個人の施設を借り上げ、魚類部が総力をあげて取り組みました。孵化槽、飼育池、水の不足と無いはずくし、結果としての病害発生、厳寒期車通勤での飼育管理など大変厳しい仕事でしたがセンター前で海中飼育放流したものが親魚で回帰したときの喜びは一入のものがありました。加工研、内水試を経て昭和時代最後の63年に2度めのセンター勤務になりました。長年の懸案であったセンター施設整備事業の機は熟し本事業が認められ、整備事業がスタートしたのが最後のご奉公でした。



平成元～2年度所長

関野 哲雄 氏

水産増殖センター発足30周年
おめでとうございます。水産増殖センターは発足して以来これまで、ホタテガイやヒラメの栽培漁業化、陸奥湾の環境監視など数々の成果をあげてきました。これは在席された多くの方々の多大な努力は勿論のこと、ご協力・ご援助いただいた漁業関係者の皆様によるところも大きいものと思います。

さて、最近の世の関心事として環境と健康問題がクローズアップされてきました。地球の温暖化や環境ホルモン・健康食品等です。これらの解決にあたっては鉱工業や農業あるいは医療等といった単一の分野では対応できなくなっております。しかもこれらは地域・国を越えてグローバル化し

てきました。こうした中にあって、これまで水産は自然環境の利用方法や健康食品としての安全性等他産業にない優れたものがあると自負できました。しかし、環境ホルモン等の問題が提起されるようになった今日、水産だけは無縁といっておれなくなりました。今後科学・技術が進みいろいろなことが解明されるに従いますますこのような相互関係が表面化してくるものと思います。

このように考えてみると、今後の水産の試験・研究に携わる皆さんは、水産の優れた特性を失うことなく時代の要求に応えるため、これまで以上に他の科学分野を含めた幅広い知識・情報を得ながら仕事に取り組んでいく必要があると思います。

今後の皆様の一層のご健闘を期待しております。



水産増殖センターへの二つの思い

平成3～4年度所長

村上 圭郎 氏

何時も車で国道4号線の平内町土屋の辺りを走ると、遙か左手前方の海を隔てて水平の彼方に微かに白く光る建物が見えて来ます。

「ああ、茂浦の増殖センターだ。」

それはセンターに多少なりとも係わった者として感じる懐かしさと何時も変わらぬ美しい佇まいを遠くに見せている姿に安堵にも似た気持ちを感じながら通り抜けて行きます。

県職員として終始一貫「水産部」で過ごして来た私ですが、その間、平成3年度から僅か2年間茂浦のアネコ坂を越えて通勤したのも今は楽しい思い出であります。

短いセンター所長在任中で私の記憶に強く残っている事は、当時22年を過ぎ老朽化著しかった初代の庁舎に代わる現在のセンターの新築でありました。

時折OBとして、センターを訪ねて静かに白亜の研究施設として威容を誇っている姿を見ると

き、私は2代目センターの建築現場監督所長として巡り合わせた幸運を強く感じ、「造ったんだ」と密かに自負しております。

次いで強く印象に残っているのは、陸奥湾のホタテガイ養殖の安定経営を図るための方策として、優良な形質を持つ養殖種苗を確保する研究の必要性を発想し、平成4年度に「ホタテガイ優良品種作出試験」として予算化できた事でした。

目的は、「長期的展望のもとに基礎的研究の充実に努めて、新たな知見を得つつ優良品種作出技術を開発する。」と言うものでした。

それは世界のホタテガイを見聞して集め、高水温に耐え病虫害やストレスに強く、そして成長の早い美味しい大型の貝の形質を選抜育種して人工採苗の技術を開発しようとするものでした。時の北村知事の特段の理解で首尾よく予算化出来たことは忘れ得ぬことの一つでありました。

当時の内なる識者連に畜産とは訳が違うと嘲笑されましたが、基礎的な生理生態の解明と知見の

蓄積を図ってゆくためにも避けて通れないテーマであり、未だにその必要性を頑なに思い込んでおります。

幸いにして若き前途ある研究者に研究テーマのタイトルは変化して行っても、その灯は受け継がれている様子に、一石を投じた者として心密かに嬉しさを感じております。



このたび、青森県水産増殖センターが昭和43年4月に開所してから、30周年を迎えることになりましたが、かつて、研究者の一人として、また、第8代の所長として勤めた者として、誇りに思うとともにお祝い申し上げます。この機会に一文寄稿できることを大変嬉しく思います。

1. 新装なったセンターと所長室のこと

私は平成5・6年度の2か年間、村上所長の後を継いで在職しました。関野所長並びに村上所長時代に、センターの全面改築が進められましたが、両所長には大変ご苦勞が多かったのではと思います。ここに感謝と敬意を表します。このようなわけで、私は、センターが立派に竣工し、新装なった所に勤めることになりました。このことを光榮に思っております。特に、所長室の広いこと、机や椅子その他備品等の立派さに驚きました。本庁での課長時代の雑居ビルから重役の個室に入ったの感でした。

2. 所長時代の思い出等

所長在職時の思い出深いことを2・3あげてみたいと思います。

まず、平成5年度には、センターの竣工式典、海況自動観測装置新システムの設計、ブラジルからの研修生の受け入れ等がありました。この他この年の11月に、青森県水産増殖センター・ホタテガイ研究グループが「ホタテガイ採苗・養殖技術

21世紀は食糧供給が世界規模の問題になる時代と云われており、それを担うのは我らが新進気鋭の若い人たちであります。

気宇壮大な理想を持って果敢にチャレンジしてはいかがですか。まず、出来ることから始めてははいかがですか。

Boys, Be ambitious!

平成5～6年度所長

菅野 溥 記 氏

の開発」の功績により、農業試験研究一世紀記念会長賞を受賞しました。これは永年のセンター職員はじめ多くの関係者の努力の賜であり、ここにあらためて関係者の皆様に感謝申し上げます。平成6年度には、ブイロボの設置、試験船なつどまりの代船の設計が印象に残っております。

この他平内町をはじめ林業試験場そして地元茂浦の方々との交流を深められたことも心に残っています。勿論その会場はヴェルサイユの中庭と私が勝手に名づけた中庭が多かったようでした。

3. 若い研究者（後輩）へのメッセージ

まず、研究対象を見つけることは難しいことですが、フィールド調査、漁業者等との対話、生物等から見つけて欲しい。そして研究を深めるために生物との会話をしたい。

次に、独創的な研究によりプリンスプルを見つけ出して欲しい。このため、よく見、よく聞き、実証し、自らの感性を磨いて欲しい。

そして、ホタテガイのへい死問題での思い出として、結局のところ、死んだ（Die）のかそれとも殺した（Kill）のかではないかと思われます。

4. 終わりに、このたびの30周年を機に、本県漁業振興のため、青森県水産増殖センターの皆様が、一層研鑽を積まれ、研究の拠点として世界への情報発信基地となることを期待しております。



平成7～8年度所長

福士正道氏

水産増殖センター発足30周年
誠におめでとうございます。

歴代の所長経験者としては、最も若輩の身で菅野所長とバトンタッチした平成7年度から2年在職しております。初年度最大の仕事は、やはり試験船なつどまりの代船建造ではなかったかと思えます。前年度の基本設計を受けて、石川島播磨重工業㈱が工事を請負い起工式は、8月下旬横浜舟艇工場内で取り行われております。工事の進捗は、順調で翌年2月上旬進水式とあわせて命名式がやや風の強いなかで進められ、3月8日当センター前の棧橋に雄姿をみせた時には、さすが感慨無量のものがありました。この年、試験船の棧橋を船舶の保全上、沖側に10メートル延長する工事が付帯して行われておりますが、それまでけい船に何かと気苦労があった船長にはいいプレゼントのようでした。

一方、陸奥湾では、ヒトデの大発生で地まきホタテガイが壊滅的な打撃を受け、特に横浜地先の被害状況には声も出ない程でした。当センターでは行政サイドでの事業とタイアップして翌年度の事業にヒトデ駆除に関する試験研究項目を設けましたが、この1件で改めてホタテガイ増養殖漁場は、恒常的にヒトデ駆除の必要性があると痛感いたしました。

平成8年度は、平内町漁協が地元役場と一体となって良質大型貝ホタテガイ生産への取り組みをした年でもありました。また、この年は「開かれた試験研究機関」を標榜して水産部所属の試験研究機関公開デーがスタートしております。期間は、「海の日」が新たに祝祭日となったこともあって当センターを会場に7月19日から20日の2日間それぞれの試験研究機関のセールスポイントを前面に出して来場者にPRしております。

ところで、水産増殖センターは本県の栽培漁業を推進する拠点となる試験研究機関として、クロソイ、マダラ、マコガレイ等本県の沿岸漁業の重要資源の種苗生産技術開発に取り組み量産技術開発の段階にきている魚種もありますので、近い将来、ひらめに次ぐ栽培漁業の対象種として登場してくることを切に期待しております。また、陸奥湾のホタテガイは、本県の栽培漁業の原点でもありますので足場はしっかりと陸奥湾にシフトし安定生産に向けてきめ細かい気配りが必要かと思えます。

業界では、「21世紀は漁村の時代」と大きなキャッチフーズを掲げておりますのでその一翼を担ってますますのご発展を祈念申し上げる次第です。

水産増殖センターが受けた主な賞

昭和47年1月 第21回河北文化賞

昭和47年2月 青森県知事表彰

昭和48年12月 第26回東奥賞

昭和55年9月 青森県知事表彰

平成5年11月 農業試験研究一世紀記念会会長賞

◎環境条件に関すること

海洋観測、浅海定線調査等関連調査（昭和43年度～）
陸奥湾海況自動観測（昭和49年度～）
貝毒関連調査（昭和53年度～）
陸奥湾漁場保全対策基礎調査（昭和54年度～）
漁場保全対策推進事業（平成8年度～）

◎ホタテガイに関すること

ホタテガイ種苗生産（昭和43年度～）
ホタテガイ保護水面管理事業（昭和43年度～）
ホタテガイ実態調査（昭和48年度～）
ホタテガイ異常へい死対策試験（昭和51～53年度）
貝類養殖漁場適正利用技術開発研究、適正収容力に関する研究（昭和51～元年度）
外海ホタテガイ漁場開発試験（昭和53～57年度）
ホタテガイ養殖漁場の合理的管理及び養殖管理工程の改善に関する研究（平成2～7年度）
ホタテガイ優良品種作出試験、高品質ホタテガイの安定生産技術開発研究（平成4年度～）
ホタテガイ貝殻散布による地まき漁場底質改良調査（平成4～6年度）
ホタテガイ種苗の種苗性評価及び改善に関する研究（平成8年度～）
ホタテガイ増殖漁場評価試験（平成9年度～）

◎貝類（ホタテガイ以外）に関すること

アカガイ天然採苗試験（昭和43年度～）
アカガイ保護水面管理事業（昭和43年度～）
アワビ種苗生産、アワビ種苗量産技術開発事業（昭和43～55年度）
アカガイ種苗生産、産業確立試験（昭和43～58年度）
ホッキガイ増殖試験、地域特産種増殖技術開発事業（昭和43～9年度）
磯根資源調査（昭和45年度～）
サザエ増殖試験、重要貝類増殖試験（昭和54年度～）
放流漁場高度利用技術開発事業、放流技術開発事業（アワビ）（昭和60年度～）
特定研究開発促進事業（アワビ再生産機構の解明、初期生態解明）（平成3年度～）
カキ類増殖技術開発試験（平成9年度～）

◎魚類に関すること

ヒラメ・カレイ類種苗生産試験、ヒラメ種苗量産技術開発事業（昭和46～61年度）
太平洋北区栽培漁業漁場資源調査（ヒラメ・カレイ類資源生態調査）（昭和47～49年度）
サケ海中飼育放流試験、サケ・マス増殖振興事業調査（昭和53～61年度）
マダラ増殖試験、特定海域新魚種量産技術開発事業（昭和54年度～）
クロソイ増殖試験、放流技術開発事業（昭和63年度～）
ヒラメ育成用餌料開発試験（平成6～10年度）
沿岸性異体類栽培漁業化促進技術開発試験（平成8年度～）

◎海藻に関すること

コンブ、ワカメ、ノリ養殖試験（昭和43～51年度）
優良海藻作出研究、優良海藻種苗開発試験（昭和61～8年度）
エゴノリ養殖実証試験、養殖管理技術開発事業（平成2～10年度）
磯焼け漁場緊急調査事業、磯焼け対策総合調査（平成3～6年度）
日本海藻場造成技術開発試験（平成6～9年度）
コンブ発生量の変動要因解明研究（平成7年度～）
バイテク種苗作出技術開発試験（平成9年度～）
海藻資源モニタリング調査（平成9年度～）

◎その他の生物等に関すること

ウニ類増殖試験、ウニ栽培漁業化試験（昭和46～3年度）
マナマコ増殖試験、ナマコ放流技術開発試験（昭和49～7年度）
資源管理型漁業推進総合対策事業（平成3年度～）